

現代社会のなかの「個人」

—— その「原子論的個性」と「人格性」 ——

The “Individual” in Our Contemporary Society

—— His “Atomistic Individuality” and “Personality” ——

圓 増 治 之
Haruyuki Enzô

※目 次

1. はじめに
2. “Individuum”としての「個人」
3. “Persona”としての「個人」
4. ブルジョア的個人の原型としての「オデュッセウス」
5. M君の場合
6. 問題提起

※キーワード

「大衆社会」 (mass society) mass < maza (パンのこね粉), massein (こねる)
「個人」…… Individual (individuum (in + dividuum…not + divisible) (atomon (原子)
…… anonymous な個人 (anonym = an + onoma…without + name) = outis (= no one)
「個人」…… Person < persona (仮面) < per (通して) + sonare (音をたてる)
…… pseudonym < pseudos (虚偽) + onoma (名前)
「かたる」…「語る」、「騙る」、「拐る」

1. はじめに

19世紀のデンマークの宗教思想家キルケゴールは、1846年に出版された或る文学評論(後に一部が『現代の批判』という題のもとに独訳されて有名となった)のなかで、19世紀中葉当時の時代について、「現代は本質的に分別の時代であり、反省の時代であり、情熱のない時代であり、束の間の感激に沸き立つことがあっても、やがて抜け目なく無感動の状態におさまってしまうといった時代である。」⁽¹⁾と特徴づけている。そして、この「情熱のない、分別の時代」に於いては、「新聞」が「公衆」という幻影をつくりだす、という。

ここでキルケゴールのいう「公衆」とは、なに者でも無いような抽象的な「個人」の無定形な寄せ集めを意味し、したがって今日いうところの「大衆」(マス)とほぼ等しい概念である。今日、キルケ

ゴールの時代とは格段の違いでもって強力、かつ大規模に、新聞をはじめ写真週刊誌、テレビなど「マス・コミュニケーション」は、キルケゴールのいう「水平化」を徹底しておしすすめている。キルケゴールはこのような今日の状況をすでに1世紀以上も前に先取的にとらえていたのかもしれない。

そのキルケゴールが、上記の評論のなかで、「無名性は現代では恐らく人が考えている以上にはるかに特徴的な意義をもつ、ほとんど警句的な意義をもっているといっているほどだ」⁽²⁾という。今日、人々は無名でもものを書くばかりでなく、署名をしながらでさえ、無名でもものを書く。いや、それどころか無名で語りさえする。ドイツでは恋人たちの手引書があるが、やがてそれに従って恋

人同士が腰をおろして無名で語り合うことになるだろう。「一人の作家が自分の魂を文体のうちに集中するように、一人の人間は本来会話のうちに自分の人格(Personlichkeit)を集中するものである⁽³⁾」のに、という。

今日の大衆社会(マス・ソサイエティー)に於いても同様に、いやますますもって、人々は各々の独自の個性をもった人格的主体として語り行動するよりも、アノニマスな個人として他の人々と同調して語り、行動する。アノニマスなアトム的個々人の抽象的で無定形な塊り(マス)の意見の方が、特定の具体的党派、階級、個人の意見、イデオロギーよりも、マス・ソサイエティーでは大きな力をもつ。どんな意見でも署名の数が多ければ多いほど、それは大きな力をもつ。大衆は今日社会を動かし、時代を動かすほどの力をもつ。しかし、誇張して言えば、署名用紙にいかにか個々人の固有の名前(onoma)が記されていても、そこに於いて問題なのはその名前をもつ人間の人格的固有性ではなく、誰でもいい名前の数だけである。そこでキルケゴールは、「公衆はすべての人びとであってしかも誰でもないところの或る巨大な怪物であり、抽象的な荒涼にして空しきものである⁽⁴⁾」という。

しかし、かく語るキルケゴール自身はほとんどすべての著作を偽名(Pseudonym)で発表した。たとえば、『あれか=これか』は「ヴィクトル・エレミタ」の、『おそれとおののき』は「沈黙のヨハネス」の、『反復』は「コンスタンチン・コンスタンチウス」の、『哲学的断篇』は「ヨハネス・クリマクス」の、『不安の概念』は「ヴィギリウス・ハウフニエンシス」の、『人生行路の諸段階』は「製本屋ヒラリウス」の、『死にいたる病』と『キリスト教の修練』は「アンチ・クリマクス」の、それぞれ著として刊行した。キルケゴールは「無名」のもとではなく、「仮名」のもとで語ったのである。「大衆社会」の萌芽期にキルケゴールは「仮名」のもとで語らざるをえない必要性があったのにちがいない。

したがって一見同義的に見える「無名」と「仮名」は、或る意味ではっきり区別することができる。この小論では、この「無名」と「仮名」という二つのタームをキーワードとして、現代の「大衆社

会」のなかの「個人」について考えていきたい。

2. “Individuum”としての「個人」

現代社会を特徴づける言葉の一つとして、「大衆社会」という語が今日しばしば用いられる。「大衆社会」と訳される英語の「マス・ソサイエティー」の「マス」とは、大量の画一的商品を機械によって生産することを「マス・プロダクション」というように、ものの量的な集まり、すなわち大量の塊り、を意味する。集まるもの、集められたものが、人間なら、その場合それは「大衆」と訳されるのである。

この「マス」という言葉は語源的には、ギリシア語の *μάζα* (パンの捏粉)、あるいは *μάσσειν* (捏ねる) という語に溯ることができる。したがって「マス」は不定形の塊りを意味するが、語源的に言ってその不定形の塊りは、捏ねて一定の型を作ることでできる塊りということになるであろう。

型を作るために旨く捏ねることができるためには、人間をできる限り細い粒子にミルしておく必要がある。近代の「合理システム」の礎石は人間を、もうこれ以上分割(divide)できない原子的存在にまで碾き砕く。「個人」を意味する“individual”という英語は、不可分なもの、すなわち「原子」を意味する“atomon”のラテン語訳として使用された“individuum”(indivisibleなもの) という語に由来するが、まさに近代の「合理システム」は人間を、原子的存在としての「個人」にまで碾き砕いていったのである。

近代の初め、人間の平均化をおしすすめるにあたって特に力のあった「合理システム」として、「義務兵役制」と「義務教育制」を挙げることができるであろう。

中世という時代を代表するのが十字軍というのなら、徴兵制による帝国主義戦争は大衆化への時代である近代を代表するといえるであろう。帝国主義戦争にあって人々は、中世の十字軍や近世の革命に参加した人々のように何か理念があってそのために武器をとったのではない。ただ人々は「召集令状」を受けて、有無を言わず戦争に動員されていただけのことである。その「召集令状」には個人の名前が書かれてあり、それこそが召集される者にとっては一大事であるかもしれないが、

召集する側からいえば、それは誰の名前でもかまわない、員数さえあえばよいのである。そして動員された者は軍隊に於いて教練によって兵士という一定の型へと捏ねあげ、練りあげられていく。戦場で死んでも、他の者によって補充がきくような型にはまっていくのである。こうして、戦場へと送られていった兵士はそこでアノニマスな者として死んでいくのである。近代の帝国主義戦争の終末には無名戦士の墓こそよく似合うであろう。

そして、「義務教育制」。よく言えば、義務教育制は、国民の知的水準をひきあげたといえるかもしれない。ということは、しかし悪く言えば、それはすべての人を水準化、すなわちキルケゴールの用語を使えば「水平化」したということでもある。

キルケゴールは、「革命の時代には武器が無料で配布されたし、十字軍の時代には参加章が広くみんなに授けられたものだが、現代ではいたるところで、処世法とか諸事便覧とかの類が無料でサービスされている⁽⁵⁾」といているが、現在の日本ではテレビの番組が無料で提供されているし、さらに文部省検定の教科書が無料で子供たちすべてに配布されている。「学校」では、軍隊という「教育の場」ほど明らかに暴力的に人間を鋳型にはめ込みはしないとはいえ、いや暴力的でないだけかえってよけいに巧妙に、それは行われる。つまり、それは計画的に立てられたプログラムに従って型通りの人間を大量生産していくのである。型にはめられるのは、一般大衆だけではない。エリートとしてエリートなりにエリート教育によって型にはめられていく。いやむしろエリートこそ型にはまった人間となっている。

「学校教育」に於いて子供たちに求められるのは、各人が自分で「考える」という活動ではなく、「計算する」能力であったり、「教える」という形で伝達されるところのインフォメーションを「理解する」ことであったり、さらに理解したインフォメーションを「記憶する」ことである。かくして今日の学校では生徒たちは与えられたものを計算したり、理解したり記憶したりするのに忙しく、じっくり落ち着いて考える暇がない。自ら考えることなしに、単に教えられるインフォメーション(information)を無批判に受身的に受けとるだけ

であるのなら、それこそ形(form)にはめられるのは教科書の知識だけではなく、インフォメーションを受けとる者自身が一定の形にはめこまれることになるのである。

このような学校の管理教育を経た人間は、さらに卒業後広大な労働管理社会のなかに投げ出されていく。極度に細分化された分業の巨大なメカニズムのなかで、個人はその部品として型にはめられ、広大なマス・ソサイエティーのなかで自分の「生きがい」を見いだせないまま、漂う。ちょうどいわば相互に分たれ空漠たる虚空のうちに投げだされたアトムのように。

まさにアトムのようにそれ以上分割不可能なまでに分たれた個人は、「誰でも同じ」無名の者として、広大なマス・ソサイエティーのなかでただただ漂う。自らを方向づけろべき「思考」の能力はすでに麻痺してしまっているし、さりとて行動へと駆り立てるバトスをもまた欠いている。アパセティカルでアノニマスな彼らを何かに向って動かすとしたら、それは一体何か。マス・コミュニケーションこそ、それだといえはしないだろうか。

「冥想」という言葉がある。よく考えるため、深く考えるためには、静かな処で、目を閉じ、口を閉じて考えなければならない。逆に言えば、視覚や聴覚の刺激は、人の気を散らせ、想いに集中することを妨げる。マス・コミュニケーションも新聞など活字によるものであれば、その読者はそれぞれ自分のペースで読み、したがって自分で考える余裕もあるだろう。しかし、テレビ受像機を前にして私たちは単なる観衆ではないし、単なる聴衆でもない。「観衆にして聴衆」、すなわち「視聴者」である。視覚と聴覚の双方が同時に挑発的に刺激を受ける。そして視覚と聴覚を通して流れてくる大量のインフォメーションに圧倒され、流される。その結果、テレビから流れてくるインフォメーションを無批判に受けとり、たわいもないおしゃべりをベチャクチャくり返すことになる。

テレビの画面に登場するレポーターと称する人間も本来なら公開さるべき公共的な事柄については何も報告せずネグレクトしながら、その一方でスターの離婚話など本来公開さるべきでないプライベートなことについてはあつかましく報告したてる。本末転倒しているというべきか、それと

も、それこそまさにマスコミの本質というべきか。とにかく、自らを動かす思考もバトスも失ってアトム的存在として個人は、しかし落着きも失って、マス・コミュニケーションによって動かされて忙しく動くのである。

大衆社会では誰もが同じ顔をしたアノニマスなものになるが故に、かえって政治家も芸能人も、そして学者すらも、まずマスコミによって、「名前」を、そして「顔」を売ろうとする。そして、「名前」が、「顔」が売れば、「名前」で、「顔」で売れる。体のような商品ですら。今書店に行けば、表紙カバーに著者の顔がでかく印刷されたいわゆる「顔表紙本」になんと多くお目にかかることであろうか。

3. “Persona”としての「個人」

しかるに、ニーチェは『人間的な、あまりにも人間的な』の第57番のアフォリズムで、「道徳において人間は自分を分割しえぬもの(individuum)としてではなく、分割しうるもの(dividuum)として取り扱う」と言う。自然にまかせて、動かされて動くのではなく、自分が定立した法則に自分を従わせる自律性に、道徳の主体としての人格(Person)という人間の有り方が存する。人格は自己を分裂させ自分が自分に命令するところに成り立つのである。

“person”(人格)という語は「仮面」を意味するラテン語の“persona”という語から由来し、さらに、その“persona”はラテン語の前置詞“per”(通して)とラテン語の動詞“sonare”(音をたてる)との合成語の“personare”(通して音をたてる)という動詞の派生語と推測されるという。つまり仮面を通して語るということである。道徳的人格は定言的な命令を自分に命じるところに成立する。

いや、道徳に於いてのみならず、「生きる」ということが、生々と生きるということが、自分自身に対して命令することを必要とするなら、人間は1個のpersonとして仮面をつけて語ることを必要としている。そしてなによりもニーチェ自身が仮面をつけて語るのに巧みな仮面の巨匠であった。ニーチェは言う。

「すべての深きものは仮面を愛する。それどころか最も深き事柄は形象や比喩に対し憎悪すら抱

いている。『さかさま』こそが、神の羞恥がそれを纏いゆうぜんと歩くべき本当の仮装であるにちがいないではないか。もし誰か或る神秘家がこのようなことを試みたことがないとしたら、奇異なことではないだろうか、と問ってみる価値はある。繊細な出来事でも、それを粗暴さでもって塞いで知られないようにする方がよいということもある。愛や途方もない度量の行為でも、その記憶を曇らせるために棍棒をとってその目撃者をたたきのめすこと程賢明なことはないということもある。多くの人は自分の記憶を曇らせ虚げることができる。その結果少なくとも自分というこの唯一の関知者に復讐することができる。羞恥は虚構の才がある。人が最もひどく恥じるのは最もひどいことに対してではない。単に仮面の背後に邪悪な詭計が存するだけではない。詭計のうちには多くの善きものが存する。……(中略)……深い精神はすべて仮面を必要とする。いやそれ以上に、すべての深い精神のまわりには絶えず仮面が増大する。彼が与える言葉の、足どりの、生のしるしのすべてが常に誤って、すなわち浅薄に解釈されるおかげで⁽⁶⁾。

素顔では恥しくて言えないことでも、仮面をつけることによって言えることがある。仮面の背後に自分の素顔を隠すことによって、かえって自分の心の奥深く隠された、例えば愛を、告白することもできるのである。まさに仮面は自己を隠すとともに顕わにする。いや自己のうちに深く隠されたものほど、素面では、仮面なしには語り出すことはできない。自己の内に深淵を蔵するニーチェが仮面を愛するのにも宜なるかなというべきか。

素面の顔を取り換えるというわけにはいかないが、仮面なら取り換えることができる。いや「できる」というだけでなく、取り換えるべきである。すなわち、ニーチェの言うところによれば、「或る一つの人格(eine Person)に執着してはならない。たとえ最も愛すべき人格であろうとも。各々の人格は牢獄であり、隠れ場でもある⁽⁷⁾」という。

人は仮面を通して自分を「かたる」とき、有りのままの自分について「語る」とともに、自分自身を「騙る」。つまり、自分自身を「より強く、より豊かに、より完全に」自分自身に見せかける。しかも、ただ見せかけるだけではない。「人は変

容し、より強く、より豊かに、より完全に自分を自分自身に見せかけて、より完全………で有る⁽⁸⁾という。つまり、人間は自分自身を「騙る^{かた}」ことによって、より完全な自己へ、より高い可能性の自己へと自分自身を誘惑的に連れていく、つまり自分を「拐る^{かた}」のである。道徳的人格も一つの仮面にすぎない。道徳的人格という一つの人格に執着することなしに、多様な仮面をつけ多面的に自己を形成していくところに、イモラリスト、ニーチェの人格があったのである。

キルケゴールは先に述べたように、様々の仮名(pseudonym)を用いてその著作を数多く公刊した。“pseudonym”は、ギリシア語の“ψευδος”（虚偽）と“ὄνομα”（名前）とから合成された語である。つまり、「A君」、「B君」、あるいは「1号」、「2号」といったように名前が無いのではなく、それは虚偽といえど名前である。その“pseudonym”をキルケゴールは「仮面」として用いるのであった。キルケゴールがpseudonymのもとで語るのは、大衆のなかの誰がしゃべっても同じようなことについてではない。そのようなことはanonymousな個人の資格で誰もがおしゃべりができる。キルケゴールがpseudonymのもとで語ろうとしたのは、彼の内に秘められた深い内面性についてである。様々のpseudonymのもとに自己を韜晦しつつ、同時にそのpseudonymを通してキルケゴールは内なる自己を語り出しているのである。すなわち、そこで語っているのは、他の誰によっても置き換えることのできないキルケゴールの宗教的人格であった。

4. ブルジョアの個人の原型としての 「オデュッセウス」

古代ギリシアの古典中の古典であるホメロスの叙事詩『オデュッセイア』の第9巻のなかに、オデュッセウスが「アノニム」（無名）を「スエーダニム」（仮名）として用いて一眼巨人ポリュペーモスにトリックをかける場面がある。

トロイア戦争から帰国の途上とある島に上陸したオデュッセウスは12人の部下と共に知らずにポリュペーモスの洞穴に入り、その捕虜になってしまう。2人ずつ次々食べていくポリュペーモスにオデュッセウスが自分のもってきた酒をすすめると、

ポリュペーモスはこれを飲み干し、二杯目を要求し、オデュッセウスに名前を尋ねた。オデュッセウスが「ダレデモナイ」（ウーティス）という名前だと答えると、「では、酒のお返しに『ダレデモナイ』を食べるのは仲間のうちで一番最後にしてやろう」とポリュペーモスは言い、そのまま酔い潰れて寝てしまった。これを見たオデュッセウスは、先を尖らせた棍棒を火で焼き、それでもってポリュペーモスの眼を突き潰した。血だらけになったポリュペーモスは棍棒を眼から引きぬくと仲間のキュクローブスたちを大声で呼んだ。その声を聞きつけキュクローブスたちが群がり集まって、「どうした」と尋ねると、ポリュペーモスは「『ダレデモナイ』がおれを殺そうとした」と答えた。そこで、キュクローブスたちは「ダレデモナイのなら仕方がない」と言って帰ってしまったので、オデュッセウスは難を逃れたという。

戦利品の財宝を積んで帰国する途上難波し、波の偶然にひきさらわれて海上をあちこち漂浪し、数々の冒険のはてに帰国するオデュッセウスに、ホルクハイマーとアドルノは、リスクを冒して容赦なく利益を追求するブルジョアの個人の原型をみてとる⁽⁹⁾。難波して集団から離れて孤立し、自然の暴威に曝された肉体的に非力な個人が、それにもかかわらずその自然の暴威にうち克つことができるには、その自然に自分を合せ自然を購着する狡智による他はない。「実際、オデュッセウスの主体は、主体をして主体たらしめる自分のアイデンティティを否定し、無定形のものへのミミクリーによって生命を保持する⁽¹⁰⁾」とホルクハイマーとアドルノは言う。

「ダレデモナイ」と名のり、無定形なものへのミミクリーによって自然のうちへ融けこんだかのように装うオデュッセウスは、単に例えばシャクトリムシのように一定の形態（小枝）へのミミクリーによって自分の生命を保持しようとするだけではない。「ダレデモナイ」と名のって自然の状態に似せることに於いて一見自然に服するかのようみえて、その実かえってそれによって自分のために自然を操作し、自然を支配せんとするのである。それは、モズ・ホオジロ・ヨシキリなどの巣にそれらに似た卵を産みおとし、掩卵するカッコウの狡智など比べようもないくらいはるかに開けた狡

智である。人間理性の狡智は、単に或る一定の形態へではなく、無定形なものへのミミクリーによって、無定形に、すなわちあらゆる方向へと向って成長せんと企る。

しかし、「自分のために自分をダレデモナイと名のり、自然の状態に似せることを自然支配の手段として操作するものは傲慢におちいる」とホルクハイマーとアドルノはいう⁽¹¹⁾。洞穴を遁れ船に乗りこんだオデュッセウスも島を離れ沖に出ると、キュクロープスたちに嘲笑の言葉を投げつけ、さらに、「キュクロープス、誰か死すべき人の子がおまえのみともない盲になったわけを尋ねたら、ラーエルトースの子、イタケーの住人、町の破壊者、オデュッセウスがめくらにしたと言うのだぞ」と、オデュッセウスは自分の本当の名前と由来を明らかにした⁽¹²⁾。これを聞いたポリュペーモスは、天に両手をさしのべ、ポセイドーンに祈って、言った。「聞いてくれ、大地をゆるがす、黒い髪のポセイドーン、もしまことにおれがあなたの子で、あなたがおれの父親だと言われるのなら、ラーエルトースの子、イタケーの住人、町の破壊者オデュッセウスが帰国できぬようになし給え。だがもし自分の国に帰り、堅固な造りの館に着いて、親しい人々に会うのが、かれの運命ならば、部下はみんな失って、他人の船で、長い苦労の末に情けない姿で帰りつき、家には難儀が待っているように」と。こう祈るかれの願いをポセイドーンは聞きとどけ、以来終始オデュッセウスを憎み、彼の帰国を妨害しつづけた、という。

ポセイドーンは不定形(amorphous)な海神である。「ダレデモナイ」と詐り称したオデュッセウスは、その仮面をみずから脱ぎ捨てたとき、海神ポセイドーンの憎しみを買い、かえって実際に不定形な海に呑み込まれかねない危険に曝されることになる。そのオデュッセウスの姿には、自分の固有の名前を失い、定形を失った(amorphousな)大衆のうちへ呑み込まれ、あるいはあちらへ、あるいはこちらへと何ものかによって動かされて動く今日の大衆社会のなかの個人の姿が予言的に示されていないだろうか。いやむしろ、英雄オデュッセウスなら不定形の海に呑み込まれずに済むかもしれないが、大衆社会の不定形の塊りに呑み込まれてしまっているという事態こそ今日の我々の真の姿

なのかもしれない。

今日テクノロジーの進歩に伴って個人としての人間は、その技術的能力が拡大するにつれ、その思考による自律性を失い、何か巨大なメカニズムに組み込まれて動かされて動くようになってしまっている。非人称的(非人格的)な代名詞が主語(主体)となって、アトムの個人を動かすようになるのである。そしてその非人格の代名詞は漠然と何かを指し示したまま、何を指し示すのか問われることなく放置されたままである。

5. 「M君」の場合

たしかに、今日相互に孤立し無関心となった個人の物理的力は技術的に飛躍的に高まった。もはや個人は無限の虚空のうちに裸のままで投げ出された個人ではない。それはいわば個室のなかの個人である。

今日個人が生きていくために自分で生活に必要な水や燃料を集めてくる必要はない。個室のなかにまで水道やガス管が配管され電線が配線されて水、ガス、電気が供給されている。スイッチ一つで個室のうちに流れ込んでくるのは水やガスだけではない、テレビからは世界各地からの情報が流れこんでくる。そして、電話回線を通じ外の世界とつながり、外の世界とコミュニケーションすることができるのである。今日個人は、いうなれば個室の大きさにまで拡大しているのである。

さらに、「足をもった個室」ともいうべき家用車は、自由に動き回ることができるが故に、実際の個室以上に「拡大された個人」であるということができよう。個人は、電話、テレビ、自動車といった道具(インストゥルメント)を自分の器官(オーガン)として拡大する。自動車は俗によく言われるようにまさに「足」である。そしてなるほどマイカーを自分の足として個人の行動範囲は飛躍的に拡大したが、しかし果してそれによって本当の個人の自由が拡大したことになるだろうか。マイカーによって空間的に自由な行動範囲が拡大したばかりでなく、さらに週休二日制などによって労働時間が短縮し、自由時間も拡大した。しかし、その余暇に人々は画一的に同じような行楽地へと車でもって殺到する。その結果は身動きのとれない車の列。自由な物理的時間・空

間が拡大したとしても、精神の自由な活動がなければ、人間はかえって深く縛られるという結果になることの証左といえるかもしれない。個人が拡大したといっても、ただ空しく外へ膨張しただけにしか、つまり幻想のうちで拡大しただけにしかすぎないのである。

しかも、幻想の中で「拡大した」個人は、アトム的無名の個人、「ダレデモナイ」(ノーボディ)ではなく、「ダレカ」(サムボディー)であるようになることを望み、狡智を働かせる。オデュッセウスが自然の狂暴な力から身を守るため、「ダレデモナイ」を偽名として名のつたが、これに対して、大衆社会の中で「ダレデモナイ」無名の個人は、自己の力の拡大という幻想のなかで、「ダレカ」であることを意志して、偽名を名のる。「今田勇子」という偽名を名のつたM君の場合がそうであった。

彼、M君は、取り調べ警察署長宛てに提出した「上申書」なるもののなかで、被害者の少女の一人を、「あったかいからとかなんとか言って声をかけ自分の車の中にゆうかいし、云々」と述べている。彼の場合、車はやはり動く「個室」であった。自分の部屋のなかに大人の女性を誘い入れるように、幼い女の子を車に誘い入れ、自分のテリトリーのなかでいとも易々と兇行に及んだのである。しかし、M君の事件が、いかにも情報社会の現代の事件らしいのはそれから後である。性的倒錯の猟奇的な殺人事件なら、現代だけでなく、たとえば阿部定事件など、過去にいくらかもあった。しかし、M君の事件の場合、それにさらにマスコミに対する「情報操作」がつけ加わる。スイッチひとつで自由に画面操作ができるビデオの世界に耽溺したM君は、「今田勇子」という仮名で「犯行声明」、「告白文」をマスコミを通じ発表し、情報を操作しようとしたのであった。

「今田勇子」という偽名については、「いまだからゆうぞ」の語呂合せであるという説、あるいはM君の本名のローマ字表記のつづり換え(アナグラム)である説等、様々に解釈されている。いずれにしても、言葉の単なる遊びにすぎず、その仮名は単に名称としての本名だけを反映しているに過ぎず、人格的内面を反映していない。

これに対し、キルケゴールが「アンチ・クリマ

クス」という偽名を用いる時、表面的な素顔が隠されることによってかえって隠された内面が表わしだされる。正岡子規は、咯血して、血を吐くような声で啼くホトギスに因んで、「子規」と号したのであるが、そこには当時死病とまでいわれた結核さえもその種にするところの子規の凄味のある諧謔精神が表われている。さらにまた彼は、書物を自分の周りを取り散らかすことの多かったので、多くの魚を祭るかのよう岸に並べるカウウソの、俗に「瀬の祭り」と呼ばれる習性になぞらえて、みずから「瀬祭書屋主人」とも号したが、このペンネームからも我々は本名の「正岡常規」よりもはるかに深く彼の諧謔に満ちた人間性をうかがい知ることができよう。親から与えられた名前とは異なり、みずから命名する仮名、ペンネーム、雅号などには人はみずからの思想を反映させることができるし、反映させようとする。仮名でもって彼の隠された深い人格が滲み出るだけでなく、人格を深めることもできるのである。

そして、「ヨハンネス・クリマクス」という仮名を使っていたキルケゴールが後になってなぜそれに「アンチ(反)」という語を冠して「アンチ・クリマクス」という仮名を用いるようになったか我々が問題にする時。また、「瀬祭書屋主人」と号していた子規は後に宿痾によって寝たきりとなり、「病牀六尺、これが我世界である。しかも此六尺の病牀が余には広過ぎるのである。僅かに手を延ばして畳に触れる事はあるが、蒲団の外へまで足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない。甚しい時は極端の苦痛に苦しめられ五分も一寸も体の動けない事がある」と述べている¹⁴が、そのように自分の周りに書物を取り散らかすことすらできなくなった子規の心中を、我々が推し測る時。そのような時、我々とキルケゴールの人格や子規の人格との間には人格的コミュニケーションが交わされることになるだろう。

然るに、「今田勇子」を名乗ったM君の場合はどうであろうか。それは単なる語呂合せか、そうでなければ体を表わさない本名の単なるアナグラムでしかない。反映すべき内面の奥行きをもたないまま、単に外へ空しく自己主張しようとしているにしかすぎない。それは、中高生が制服のズボンのスソを拡げたり、スカートのヒダの数を多く

して自己主張しようとするのと同じ様に、空しい自己主張でしかない。しかし、空しいとはいえず「今田勇子」の仮面を通してともあれ彼は自己主張できたと思えた。つまり、少なくとも彼は人格の偽形態(pseudomorph)を形成しえたのである。とにかくそれによって無形態(amorphous)な大衆から脱け出せたかのように彼は幻想しえたであろう。事実、マスコミは彼の意図したように彼の「犯行声明」によって躍った。彼は幻想のなかで自己の拡大を確認したにちがいない。マスコミが空騒ぎすればするほど、彼は自己拡大の幻想を膨張しつづけたにちがいない。

しかし、彼の自己拡大は所詮幻想のなかでそれではしかなかった。彼の犯行が暴かれた時、その幻想はいとも簡単に破られる。しかしすでに一旦躍り始めたマスコミは、いよいよもって躍る。報道カメラマンたちは厚かましくも彼の個室のうちにまでズカズカ上りこみ、プライバシーの権利を踏み躪って、彼のプライバシーを暴き出す。テレビカメラは大衆＝視聴者の眼の代理のような顔をして厚顔にもM君のプライバシー(いくら凶悪事件の犯人であってもプライバシーはある、まして容疑者にすぎない段階であればなおさらである)を覗き見する。そしてテレビのレポーターは、視聴者の代弁人のような顔をして聞き廻り、うわずった声で現場から報告する。その背後からは映画『地獄の黙示録』さながらヘリコプターのプロペラ音が効果音よろしくいやがうえにも視聴者の好奇心を煽情する。その音の迫力に圧倒されて視聴者はレポーターと称する者たちの伝える情報が、本来自分たちが知りたがっていたことであるかのような錯覚に陥るのである。自ら仮面をつけて語るべきものを自らのうちになにももたない一般視聴者・読者、一般大衆はマスコミという代理者＝仮面を得て、マスコミを通して報じられること、語られることが、みずから知りたかったこと、語りたかったことであるかのように錯覚するのである。

6. 問題提起

現代の消費社会は、一昔前のように画一的製品を大量生産し大衆に大量供給するのではなく、「分衆」化した消費者の多様なニーズを把らえて、「多品種少量生産」する社会であるともいわれる。雑

誌も、読者の多様なニーズに応えるべく、かつてなかったほど多様な雑誌が百花繚乱の如く咲き競っている。しかしそのニーズも先取的に把えられたニーズ、マスコミによって創出されたニーズでしかない。

今日の日本の社会は「情報資本主義」というたわいもないタームがそれでいて妙に真実味を帯びるなんとも情けない状況にある。そういう時代に於いて求められる対象は第一次的なモノ、あるいはモノ的生活諸条件から遊離して、ファッションや情報、サービスに向けられる。今日ほとんどの日本人がもつといわれる「中流意識」は、機械的ではなく、より柔軟性をもつとはいえずやはり画一化志向をそのうちにもつことにちがいない。提供される情報、サービスが多種多様になり、好みによる選択の巾ができたというだけのことでしかない。「中流意識」はマスコミを通じて一方的に垂れ流されてくる多種多様な情報によって、流されていく。「中流意識」が「虚偽意識」にすぎないのではないかという一抹の疑念を伴いながら。

そして、もしそのような「虚偽意識」ではないかという疑念が一抹でも我々の意識を掠めるなら、我々は「我々を偽購するgenius malignus(狡猾な霊)は誰か」と敢えて対決的に問う必要があるだろう。なぜなら、敢えて人格対人格の仮面剥奪的な対決を行わずしては、結局は虚偽意識の流れのなかでそのまま流されていってしまうことになるのだから。

(1990. 2. 16 受理)

付、人名録

キルケゴール S.A.Kierkegaard 1813~1855……デンマークの宗教思想家。ヘーゲルの思弁的合理主義の立場に反対し、独自の個人主義的信仰の立場を開いた。1846年、週刊風刺新聞『コルサル』(「海賊」の意)によって侮辱的な人身攻撃をうける。キルケゴールの痛烈な市民大衆批判もこの「コルサル」事件が一因している。

ニーチェ F.W.Nietzsche 1844~1900……ドイツの思想家。ヨーロッパ文明によって抑圧された個人や生の解放を求め、ヨーロッパの伝統と真剣に対決した。「ヨーロッパのニヒリズム」克服の彼の努力は、ハイデッガーをはじめ現代の多くの哲学者に大きな影響を

あたえている。主著として『ツアラツストラはかく語りき』が有名。

ホメーロス Homeros B.C.8C.……古代ギリシアの詩人。ヨーロッパ文学最古にして最大の叙事詩である『イリアス』『オデュッセイア』の作者とされる。『オデュッセイア』は英雄オデュッセウスがトロイア戦争からの帰途難破し、十数年の漂浪の後帰国、彼の留守中妻に言い寄った男たちを殺戮した物語を歌った一大叙事詩。

ホルクハイマー M.Horkheimer 1895~1973 アドルノ Th.W.Adorno 1903~1969 …ともにドイツのフランクフルト学派の代表的思想家。二人は共著『啓蒙の弁証法』によって現代社会を鋭く批判した。彼らによれば、現代社会においては人間の内なる自然としての欲求は、抑圧されて、大衆の非合理的衝動へと歪曲されるか、さまざまな社会的技術によって操作されている、という。

正岡子規 1865~1902 ……明治の俳人・歌人。本名常規（つねのり）、幼名処之助、のち升（のぼる）。雅号は瀬祭書屋主人、竹の里人、盗花など数種。短歌・俳句および写生文による文章革新運動を推進した。晩年のほとんど病床に臥すも、死ぬまで旺盛な創作活動を続けた。『病牀六尺』はその病床の記録である。

註

- (1) S. A. Kierkegaard, "Eine literarische Anzeige" Aus d.Dän.übers. von Emanuel Hirsch. -1983. (Gütersloher Taschenbücher Siebenstern;614) S. 72.
- (2) Ibid. S. 110.
- (3) Ibid.
- (4) Ibid. S. 99.

- (5) Ibid. S. 73.
- (6) F. W. Nietzsche, "Jenseits von Gut und Böse" Nr. 40.
- (7) Ibid. Nr. 41.
- (8) F. W. Nietzsche, "Der Wille zur Macht" Nr. 808.
- (9) M.Horkheimer und Th. W. Adorno, "Dialektik der Aufklärung" S. 42.
- (10) Ibid. S. 62.
- (11) Ibid. S.63.
- (12) Homeros, "Odyssee" IX, 501 ff. (高津春繁の訳を参照した)
- (13) 1988年から1989年にかけて東京・埼玉西部で幼女が次々と誘拐され殺害された「幼女誘拐殺人事件」の容疑者。この事件は単に猟奇的であったばかりではなく、1989年2月に被害者の一人の自宅に被害者の遺骨の入った段ボール箱が届けられ、さらに自宅と新聞社に被害者の写真、「犯行声明文」、「告白文」が送られ、いわゆる「劇場型犯罪」の様相を呈した事件であった。
- (14) 正岡子規、『病牀六尺』（岩波文庫）5頁。

(追記)

この論文は、1989年12月2日の「第13回長野大学公開講座」（統一テーマ：「現代の『個』を考える」）での講演にもとづく。余り「大衆向き」とは言い難いにもかかわらず、このようなテーマのもとで公開講座で開催していただいた図書委員会のご苦勞に対し心より感謝いたします。また、この公開講座ではこの度退職なさった神津 若林両先生にご挨拶や司会のお骨折りをいただき、ありがとうございました。ここに感謝の意を表します。